1870年代のクルップ社における企業＝地域共同体化政策の展開

田　中　洋　子

はじめに

ある社会で資本主義化が進んでいく過程は，必ずしも単純にそれ以前に資本主義化した社会のそれと同じか，少なくともきわめて近い方向性を持つものであると言うことはできない。それは，その社会が資本主義化を後発条件のもとで行うという，世界史的な状況のちがいによって規定されているという意味を含むだけではない。おそらくそれと同様に重要な点として，資本主義化する以前の社会の，それぞれの歴史の中で形成されてきた社会的な条件が，資本主義化に際しても，思われている以上の役割を果たしていると考えられるからである。

資本主義化・工業化というものは，それ以前の社会の様々な関係を掘り崩していく作用を強力に持っている。しかしそれと同時に，資本主義化そのものもまた，伝統的な社会の制度や慣習，人々のものの考え方や生活態度などを，その社会的与件とせざるを得ない側面を持っている。そうした与件によって，資本主義化は一定のかなり大きな制約を受けると同時に，両者がお互いに作用を及ぼしあうことを通じて，いわばその社会なりの資本主義というものを形成していくと考えることができよう。

その一つの例として，イギリスに遅れて資本主義化の道を歩き出したドイツの例を取り上げてみよう。ドイツが19世紀半ばに経済的発展を開始した時，その資本主義化に深く関わる社会的与件として，少なくとも二つの条件をあげる必要があろう。既に別な所でも何度か論じているが，一つはドイツの手工業を中心とした，ものづくり・労働観に関わる伝統である。これは企業内の労働組織や労働者の管理に，工場内のマイスターの形成をはじめとして大きな影響を及ぼすものであった[1)]。もう一つはドイツ社会が資本主義化の初期から，企業に労働者の生活単位としての機能を与えたことである。これは，労働者の病気・

死亡時の共済金庫が，企業も労働者の半分の拠出金を出すことを前提とした，企業内疾病金庫として法的に定められていったことによく表されている[2)]。

企業単位で労働者の生活を保障していくようなやり方は，その後，企業自身によって更に発展させられることになっていく。特にドイツ経済の発展を中心的に担った重工業大企業においては，企業が積極的に労働者の生活に深くコミットしていく姿勢が強く見られる。言い換えれば，企業が自らを一種の生活共同体として編成していこうとする志向が存在していたのである。

ここには，資本主義化によって解体されると論じられることの多い共同体的な機能を，資本主義化を進める企業が逆に担っていく例を見ることができる。つまり，ドイツの大企業は，社会の伝統的な条件との絡み合いの中で資本主義化を押し進めようとする際に，伝統的な共同体に代えて，企業という新たな共同体を作るという政策を，自ら採用することになったわけである。

19世紀後半のドイツ経済の発展期における，こうしたドイツ企業のあり方を見ていくために，ここでは一つの事例研究として，第一次大戦前にドイツ最大のコンツェルンとなった重工業大企業，クルップ鋳鋼所を取り上げてみたい。クルップは単にドイツの代表的な大企業であるばかりでなく，そこでの労働者管理の政策が，他の企業の追随を招いていくようなリーディングな存在でもあり，言わばドイツの労資関係の一つの極を形成する位置をしめていたと考えることができるからである[3)]。

それは更に言えば，1870年代という早い時期に，世界に先駆けて企業と労働者との共同体的な関わりという一つのパターンをつくり出したという意味でも，非常に重要な位置にある。イギリスやアメリカが，市場を中心とし，賃金を媒介とした労資の関係を形成していたその時期に，ドイツ大企業ではそれとはかなり異質な関係がつくりあげられていた。それは後の日本の労資関係にも少なからぬ影響を与えることにもなるのである。

ここでは，クルップ社で1870年代に大規模に展開された企業内福利政策を追

うことにより，ドイツ大企業が求めていった共同体的な志向性と，その結果もたらされた企業と労働者との関係のあり方について，主にクルップ歴史文書館資料に依拠しながら，検討を加えていきたい[4)]。

注

1）田中洋子「19世紀中葉のクルップ鋳鋼所における工場マイスター制の形成」『社会経済史学』第53巻第1号（1987年），同「クルップ鋳鋼所における工場マイスター制の展開 1850～1870年」『社会経済史学』第58巻第3号（1992年）を参照。

2）田中洋子「ドイツ企業内福利政策の生成 —— クルップ鋳鋼所に見るその社会的・経済的背景」東京大学『経済学研究』第30号参照（1987年）。

3）田中洋子「企業共同体と社会的労働運動の相剋 —— 世紀転換期のドイツにおける鉄鋼・金属工業の労資関係(1)(2)(3)(4・完)」東京大学『経済学論集』第56巻第1号，第3号，第57巻第1号，第2号（1990～1991年），同「ドイツ労資関係を理解するために——第一次大戦前までの見取図・試論」『労働運動史研究会会報』第24号（1992年）を参照。

4）なお本稿は，社会政策学会第74回大会において「19世紀後半におけるドイツ企業内社会政策の展開」として報告したものの一部であり，また博士論文「ドイツ大企業における労働者統合体制の展開——19世紀中葉から第一次大戦前までのクルップ鋳鋼所を対象として」（東京大学大学院経済学研究科，1992年）の一部をなす。

1．背　　景

(1)　「最も必要なものは人」

クルップにおいて，企業内の福利政策が大きく展開したのは，1870年代前半においてであった。既にそれまで，1850・60年代においても，労働者用の疾病金庫や年金金庫の企業による設置，一部の住宅や寮の建設などが行われてきたが，1870年代前半に行われた福利政策はそれまでにない大規模なものであった。労働者住宅，消費組合店舗，病院，学校などが次々と建設され，労働者の生活

に対する企業からの関与はこの時期に一挙に拡大されたのである。

なぜ，この時期にそれほど大規模な福利政策の展開が行われたのか。その最も直接的な要因として考えられるのは，1870年代初頭のドイツ経済の未曾有の好景気による労働移動の激化に対して，特に基幹労働者部分の企業内定着をはかる必要性が増大したことである。

1860年代末から1873年前半までを頂点とするドイツ経済の好況期は，「繁栄する経済」が「今まで達したことのない大きさと力の段階」に到ったという確信を人々に与え，クルップのあるエッセン市周辺の鉄鋼業全体もまた「特別に活発な発展」をとげていた[1]。クルップでも，1860年代後半から建設が続いていたパドル工場，ベッセマー工場，コークス工場などの設備が本格的に稼動しはじめ，労働者数も，1860年代に6000人程度の規模だったものが，この好況期にはじめて一万人を突破するほどの増加ぶりを見せた[2]。

それと同時に，労働者の離職率も急激に高まった。労働者数の最高を記録した1873年には，その年度の在籍労働者のうち，77パーセントまでがクルップを離れている。1881～86年の平均離職率が21パーセント程度であったことを考えると，これがきわめて高い率であったことがわかる[3]。

こうした労働者の急速な増加とそれに伴う労働移動の激化という事態に直面して，特に労働者定着へのなんらかの政策が緊急に求められる状況にあったことが，この時期の福利政策のまず直接的な背景となっていたと言える。

しかし同時に，このような企業内の労働者に対する大規模な福利政策の実施は，それ以前の段階から，既に経営者であるアルフレート・クルップの頭の中で計画されていたものであったことも事実である。それも，単なる「労働移動の抑制」というような消極的な効果だけを狙ったものと言うより，むしろ積極的に基幹労働者の長期勤続をねらう意図を持つものであった。

アルフレート・クルップは既に1865～66年にこう述べている。

「必要なことは多くのしっかりした手工業者のため，一番いい場所に快適な

家族用住宅をつくることである。我々は将来，これまでより多くの労働者，特に放浪する個々の人々よりも，多くの家族を必要としている。これまで個々の渡り鳥的な大衆のために寮を建設してきたが，労働者はなお移動し続けている。手押車を押す力のかわりに，鍛造工や圧延工，旋盤工や仕上工などの労働者が，多くの注文をさばくために来るようにするのだ」[4]。

1870年代の初頭には，

「我々は大きな犠牲を払わねばならないと思う。さもないと我々は最も必要なもの，即ち人を失うことになる。我々が人々に確かな住まいを与えれば，かわりに我々もそこからメリットを得ることができるのだ」[5]。

「我々の工場は大きな，とても大きな共同体にならなければならない」

とアルフレート・クルップは述べている[6]。ここからは，クルップが労働移動の抑制を超えて，むしろ積極的に企業の共同体的な性格を前面に押し出すことによって，基幹労働者による企業体制づくりを意図していたと見ることができよう。

1870年代の前半を中心に行われた様々な企業内福利政策への投資額は，総計六百万マルクにのぼった[7]。こうした大きな投資に見合うほど，基幹労働者の維持，定着は重要視されていたと言える。企業全体を大きな共同体にするという発想が，基幹労働者を企業内に確保し，落ち着かせる政策のベースに存在し，それこそが同時に，企業の経済的利益に最も一致するものと見なされていたのである。

(2) 「みんなの幸福」

こうした福利政策についての発想は，また，この時期のドイツ社会で広がっていた思想からも影響を受けており，また相互に影響を与えあっていたと思われる。それは人を確保する手段として，特に「共同体」化を必要とするという認識が出てくる際の重要な背景となっていたと考えられる。

アルフレート・クルップはこの時期，次のような，後によく引用される有名な言葉を残している。

「労働の目的は公共の福祉，みんなの幸福 Gemeinwohl にあるべきである」[8)]

「上は国家から下は家族まで，およそ共同体というものには忠誠 Treue が必要である」[9)]

ここに現れている考え方は，この時期に強く主張された「福利国家 Wohlstaat」論と非常によく合致している。1830・40年代に強調された国家・企業による労働者への社会的扶助を求める主張は，1850・60年代の自由主義的な風潮の中でいったん薄らいでいたが，それは二回の戦争をへてドイツ帝国が誕生する中で，再び新しい帝国のイデオロギーとして復活していた。1873年成立のドイツ社会政策学会が，没落手工業者の救援，労働者階級の地位向上，分配の公正の実現のために，「国家が全体利益を考慮」し，全国民へ「倫理的義務を遂行」する「福利国家」となる必要性の議論を展開したことは[10)]，皇帝，ビスマルクを始め社会的に大きな影響を与え，この時代の代表的な思想潮流を形成していたのである[11)]。

こうした考え方と呼応しながら，アルフレート・クルップもまた労働者の個人的自助努力のみに生活の向上をゆだねようとする「マンチェスター派」的に振る舞うことなく，企業のレベルにおいて，一つの共同体的福利社会を形成しようとしていたと言うことができよう。「個人の幸せを願い，企業の発展を願う」[12)]もとで，労働者個人の幸せと企業の発展という二つの課題の実現が，企業内福利政策を通じてはかられたわけである。

それは同時に，当時のドイツ社会を脅かすと考えられていた社会民主主義運動に対抗する性格を初めから内に含んだものとしても存在していた。福利国家論の発生は，もともと中間層の没落及び労働者階級の困窮などの問題状況に対して，国家と工場所有者による「倫理的」方策のもと，彼らに調和的な文化を享受させ，彼らを健全な有機的国家の一員に組み込むという思考方法からきていた。それは当然，脅威の対象としての労働運動による社会の転覆ではなく，

労働者全体の経済的・文化的水準を引き上げていくことを通じてよりよい社会を実現するという方向性を持っており，それは国家にもクルップにも社会民主党と労働運動をあくまで拒否する政策を当分取らせていくこととなる。

クルップにおいて1872年に，労働運動に対抗して主張された「ヘル・イム・ハウゼ（一家の主人）」という言葉は，まさにこの時期のドイツ社会の福利社会的イデオロギーを，企業という一個の経済的に規定された共同体の単位の中で実現していこうとする姿勢を表していたと考えられるのである。

2．大規模社宅団地の建設

(1) 社宅への「配慮」

1870年代前半にクルップで進められた様々な福利政策の特に中心をなしたのは，一連の労働者住宅，社宅団地 Kolonie の建設であった。それはその大規模さと美しさで多くの労働者の企業への帰属意識を一気に高めることによって，クルップの生産体制の安定に大きく寄与し，同時に労働者の「プロレタリアート化」を阻止する効果を持つものであった。

「翌年から良い住宅，社宅団地を一人一人の労働者に建てねばならない。いろいろな所に浴場と洗濯場があるもので，よい階層の労働者の宿泊施設にはホテルのように大食堂やビリヤード，ボーリング，娯楽場，講演会場を入れよう」

「10年の内に，たいていの労働者が我々か自分の家に住めるようにしなければ」

と1871年にアルフレート・クルップが語った夢は，数年のうちに少なからず実現された[13]。社宅団地の圧倒的部分は1871年から1874年に建設され，そのほかにも企業による購入や賃借による工場周辺の住宅の社宅化，その後の増築などが加わって数千戸の住宅を供給するようになっている。大きな社宅団地としては

ノイ・ヴェストエント Neu Westend とノルトホーフ Nordhof と呼ばれる団地をはじめとして，バウムホーフ Baumhof，シェーダーホーフ Schederhof，クローネンベルク Cronenberg といった団地が最も大規模で中心的なものとして建設されている（表１）。

それぞれの社宅団地は，入居対象者を初めからある程度設定して建設されたものであり，時期を追って団地の住宅としてのレベルが向上していくことがわかる。

まず，かわきりとなったノイ・ヴェストエントとノルトホーフは，入居対象者としてかなり低い生活水準の労働者を想定したものであった。これらはそれ

表１　クルップの主な社宅建設

社宅名称	建設時期	戸　数	部屋数
Meister 住宅（Hügel-Str)	1861/62	10	5
Alt-Westend	1863	114-136	2-4
Neu-Westend	1871/72	96-219	2-3
Nordhof	1871	147-154	2-4
Baumhof	1872-80	72-154	3-5
Schederhof	1872/73-91/99	470-735	2-4
Cronenberg	1872/74-99/01	401-1494	2-4
Baracken-Wohnung auf der Schederhof	1872/73	280	2
Barackenbauten an der Kaupenstraβe	1872-1900		
Beamte-Wohnung(Hohenzollern-Str)	1873/74	15	9
Altenhof	1894-1907	834	
Alfredshof	1894/99-1918	232-1695	
Friedrichshof	1899/00-1907	200-525	
Meister 住宅	1901	197	4
Beamte 住宅	1905	206	
Meister 住宅（Kerchhoff)	1907	116	

出典：*Das Arbeiter=Wohnhaus*, S. 10-69 ; *Statistische Angaben*, S. 93 : Quellensammlung, S. 414 ; Wohlfahrtseinrichtungen 1, S. 13-19.

ぞれ二，三部屋ずつの二軒家が16棟で計96戸，二一四部屋で計147戸を持つものであったが，続いて建てられたバラック住宅（シェーダーホーフ団地内及びカウペン通り）と共に，この二つは資材を節約した最もひどいものと言われ，最低生活者への援助を意識したものだった[14]。これらの建設が行われた時，アルフレート・クルップは次のように述べている。

「これはすべての貧しい人々と家族，すべての貯蓄をする必要のある人に対し，最低価格で健康的な宿泊と食事を与えるためのものである。それは決して，あと数ターラー多く払ってでも，もっと快適で美しい所を選ぶような，そういう人を対象にしたものではない。そうした希望に対しては，もっとがっちりした造りで，地下室付きの数階建で，木材表張の上塗りがなされた別の住宅が建設されるであろう」[15]。

このアルフレート・クルップの言葉の通り，より上層の労働者向けの社宅団地が，それに続いて建設された。1872年，三一五部屋ずつの六戸が連なったもの38棟からなるバウムホーフ，そしてクルップ住宅の代表格となる二一四部屋ずつの六戸が連なったもの70棟のシェーダーホーフ，及び二一四部屋ずつの六一十二戸が連なったもの192棟のクローネンベルクである。

「1870年代初期の第一期建設段階のクルップ集合住宅の中で最も快適なもの」とされるシェーダーホーフとクローネンベルクは「正面の所謂『貴族化』で単調さを廃し」，「見晴らしの統一性」は「住人に『自分の』家との一体性を与える最低限の可能性を与えた」と言われている[16]。これによってクルップは，マイスター用のものと収入の少ない補助労働者向けのバラックとの間に，工場の広範な専門労働者数千人を収容する大規模な社宅団地をつくりあげたのであった。

これらの住宅の建設計画には，アルフレート・クルップも直接深く関与していた。

「労働者住宅には，ただ庭師によって植えられる予定の木々だけではなく，更にもっとずっと多くの落葉樹がつけ加えられて植えられるべきだ。そしてた

くさんの草花に囲まれた大きな泉があり，木陰にベンチを置き，誰でもここに来たくなるような庭をつくるのだ」[17]

と指示したり，また南と北で日照条件がちがう住宅に対しては

「北のみに面している所は寒いのでよくない。健康を守る条件がすべてにまさって重要である」

「各戸には食堂にベランダをつけて自由に動けるようにすることが絶対必要である」[18]

として設計段階での間取りの変更も求めている。また

「マイスターと労働者の住宅はぜいたくにしてはいけない。一般的に求められている以上に一部よくした所があると，ほかのすべての人たちが逆に不満に思うことになる」

と住宅レベルの一定化を求めている[19]。

更に彼は実際に建てられた住宅を見て回り，チェックを行ってもいる。1872年に建てられた新しいバラック住宅，リンデンの建設に際してアルフレート・クルップは次のように取締役に苦言を呈している。

「朝早く私は人々の満足した様子を見れると楽しく期待してリンデンに行った。――しかしそこでどんなにがっかりしたことか。人々は私に次々と水がない，便所がないと苦情を言ってきた。一体そんなことが考えられるか？ 清潔さと健康を保つのに必要なものがないとは？ リンデン・コロニーを回って私がそこで見つけたのは，ひどく汚れて使えない泉であり，人々は私になんとかしてくれと言った」。

「多大の出費をしても，無頓着さと怠慢のせいでかえってそれが不満をもたらし，その成果を遠ざけることがあるのだ」[20]

として彼は建設施行者を強く非難している。アルフレート・クルップは大きな投資によって，人々の「満足」の度合いを配慮しつつ，できる限りその引き上げを求めていたと言える。

こうした配慮は労働者の間でも高く評価されるようになる。

「昼食時には労働者は晴れた日には食堂から外にでて，緑の中，白いテーブルでみんなで食事をした。そばには泉があふれ，とても気持ちがよかった」

これ自体は工場内施設についての労働者の回想であるが，こうした状況が生み出された場所では，アルフレート・クルップの意図がほぼ実現されていたと見ることができよう[21]。

こうした労働者の「満足」を生み出すような施策を，アルフレート・クルップが率先して実施していったことは，多くの労働者の間にアルフレート・クルップへの個人的信頼感を生み出す背景ともなっていた。のちに労資間の紛争が起こった時にも，

「そのこと（悪い状況）についてクルップ（アルフレート・クルップないしその息子フリードリヒ・アルフレート・クルップ）は何も知らないのだ」

「何千回となく労働者・職員から次のような願いが言われた。即ち，もう一度アルフレート・クルップがあらわれてくれさえすれば，なんとかしてくれるだろう，と」

と語られるようになるのである[22]。

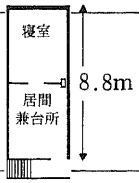
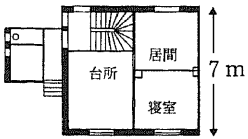
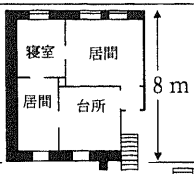
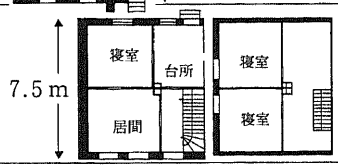
(2) 社宅の住人

これらの社宅団地はいずれも工場に近く，15分程度で工場に通うことができ，労働者街の賃貸住宅よりも衛生的で部屋も広いという長所を持っていた。シェーダーホーフやクローネンベルクは，主に２ＤＫまたは３ＤＫの間取りで，バラック住宅の１ＤＫに比べて余裕のあるものだった（表２）。

「工場はこれによってもうけてもいけないし，損失を出してもいけない。この施設は生産的ではなく機能すべきで，５～６％の利子分だけカバーできればよい。その効用は間接的であり，間接的ゆえに非常に意義の大きいものである」

とアルフレート・クルップが考えていたように，家賃は市価よりも二割以上安

表 2　クルップ社宅の間取り例

部屋数	家賃	社宅団地名	間取り例
2 ‖ 1DK	月60～ 120 Mk 平均 100 Mk	↑バラック住宅 ↓	
3 ‖ 2DK	100～ 220 Mk 平均 150 Mk	↑ ノイ・ヴェストエント ↓	
4 ‖ 3DK	130～ 260 Mk 平均 200 Mk	↑ ヴェストエント ノルトホーフ シェーダーホーフ クローネンベルク ↓	
5 ‖ 4DK	255～ 350 Mk 平均 300 Mk	マイスター住宅 ↓	

出典．Das Arbeiter＝Wohnhaus auf der Kruppschen Guβstahlfabrik in seiner baulichen Entwicklung, Essen, 1907, S. 19-74.
ただし，家賃は1907年当時の金額を示している。

いレベルに押さえられていた[23]。

1875年の各社宅での住民状況を表 3 で見てみると，労働者は二人前後の子供を持ち，たまに間借り人を置いていたことがわかる。特に大きな団地であったクローネンベルクやシェーダーホーフでは，0 ～ 5 歳の子供の数が非常に多く，主に若い夫婦がこうした社宅に住みついていったことを示している。これらの子供たちはその後，

「クローネンベルクっ子 die Cronenberger Kinder」

表3　クルップ社宅における住民状況　1875年11月

社宅名称	労働者数	住民数		子供数（年齢別）			労働者一人当子供数	間借人数	家畜数 山羊・豚・牛
		男性	女性	0—5歳	—10歳	—15歳			
Westend	341	689	578	301	209	135	1.9	58	—
Nordhof 1	176	378	344	173	136	89	2.3	19	—
Freistadt	202	382	340	194	99	49	1.7	25	8
Limbeckerplatz	98	147	177	70	36	27	1.4	39	—
Limbecker Ch.	166	300	296	129	73	52	1.5	33	2
Fronhauserstr.	118	218	223	92	70	67	1.9	20	3
Baumhof	100	237	230	129	77	48	2.5	11	14
Holsterhausen	280	560	565	296	163	109	2.0	3	—
Schederhof	640	1236	1143	682	351	161	1.9	84	1
Kronenberg	1695	3244	2851	1947	724	430	1.8	267	7
Menage, Caserne	560	561	2	2	—	—	—	—	—
他（13カ所）	501	1018	951	348	310	207	1.7	65	67
合計	4877	8970	7700	4363	2248	1374	1.6	624	102

WA. 41/6-8, Personen-Aufnahme der Bewohner Krupp' scher Gebäude am 28. Nov. 1875. ただし，労働者の中には16歳以上の未婚のクルップ労働者も含まれているため，労働者一人当りの子供数は実際にはこの数値よりもかなり高いと考えられる。

と呼ばれるようになっている[24]。

この社宅団地に住むことのできる資格を持つのは，クルップのすべての労働者と職員のうち入居希望を出した者であった。その中でも工場側の裁量により，長勤続で子供の多い者が優先的に考慮された。更に鍛治工，修理仕上工，機械工及びマイスターは，いつでも工場に来れるよう，意図的に工場の近くの住宅に配置された[25]。家賃は賃金からの天引きで，住人は住宅の監視職員と地元警察の監視のもとで，細かく規定された賃貸規則に従う義務を負っていた[26]。特に重要だったのは，住人が労働契約の終了と同時にすぐに社宅を出ねばならないという規定であり，いったん社宅に慣れた後はクルップから離れたくなくなる，

労働移動を抑制する効果を持っていたことがわかる[27]。そのことはのちに労働運動の側から「産業の封建性による労働力の拘束」だとして非難を受けていくことになる[28]。

こうした社宅団地は結果として，1874年以降，1890年代に到るまでずっと，エッセンのクルップ鋳鋼所で働く労働者のおよそ三分の一前後を収容することになる(表4)。それはクルップの生産体制にとって，大きく取った基幹労働者部分であったと言えよう。それは特に長勤続労働者層を中心とした調査においては，彼らの約六割が社宅住まいであることにも現れている（表5)。

シェーダーホーフやクローネンベルクに見られる立派なたたずまいは，ごく一部のマイスター住宅や貧困層向けのバラック住宅建設という趣旨とは異なり，より積極的に工場の広範な中堅労働者層をカバーし，彼らにクルップ団地への帰属感を持たせることによって工場における生産体制の安定を実現する重要な働きを持っていたのである。こうした社宅団地の建設は，次のような他の福利政策との相乗作用を伴って展開していくことになる。

表4　クルップ労働者における社宅居住者の割合

年　　度	1870	1875	1880	1885	1892
(a)クルップ全工場労働者数（人）	8400	13900	15500	17181	25301
(b)内既婚者数				11498	15562
(c)内エッセン労働者数	7172	9997	9092	11007	17178
(d)家族を含む人数				61946	72568
全クルップ社宅居住者数				6734	6984
対(a) 割合　(%)				39	28
対(b) 割合　(%)				59	45
エッセン鋳鋼所社宅数　(戸)	349	3271	3250	3385	3633
対(c) 割合　(%)	5	33	36	31	21

出典．Ergebnisse der Personenstandsaufnahme seit dem Jahre 1885, in : Statistische Angaben, S. 35, 95-97.

表5　長期勤続労働者の住宅事情

住宅の種類	%
クルップ社宅団地	58
一般賃貸住宅	27
自宅	11
その他	4

出典．Ehrenberg & Racine, Arbeiter-Familie, S. 373.

3．日常生活の実質的包摂

(1)　消費組合

社宅団地の建設と同時に進められた福利政策の一つに，消費組合 Konsum-Anstalt による消費生活援助があげられる。かつて1846—47年の農業不況の折に，クルップも労働者用に麦やジャガイモなどを買い込み，労働者へ実費で分けたことがあったが，その後はそうした消費物資についての直接的関与はなくなっていた[29]。1858年に工場内に直営のパン屋ができ，賃金の天引きでパンを売ることが始まっていたが[30]，工場が本格的に労働者の消費生活に直接関与しはじめたのは，1868年のエッセン消費組合の企業内施策化によってであった。

既にライン地方では，ザクセン・ベルリンと並んで，早期から消費共同組合運動がシュルツェ-デリッチュの自助運動，自由主義左派の労働者向上運動として起こっていた[31]。1860年代初頭に盛り上がった運動の中で，エッセンでも1865年10月，クルップの職員とマイスターが中心になってエッセン消費組合 Essener Konsumverein が創設されている。それは，デュースブルクのF・A・ランゲらの自由主義的共同組合運動や ADAV（全ドイツ労働者連盟＝ラサール系）の影

響のもとに，手工業者や下級職員，労働者，日雇い，職人など広範な層を対象とした地域的団体として活動を始め，多くのクルップの労働者も参加していた[32]。

これに対して当初クルップはその存在を黙認したにすぎなかった。しかし，半年もしない内に，アルフレート・クルップは，

「労働者の生活を援助できるし，基幹労働者の形成に役立つし，賃上げをするより生活改善に役立つ」

という三つの効果を消費組合に認めると同時に，それを経営の施策として採用する方向へ転換した[33]。工場側はそれを企業内組織にすべき理由として，

「消費組合はほとんどがクルップの工場の成員で占められており，その運営状態が困難になったので工場が引き継ぐべきである」

としていた[34]。しかしこの間の事情については他方で，

「工場は組合の経済状態がいいのを見て引き継いだ」

とも言われている[35]。

「わずかの給料で暮らしていかねばならない人が，できるだけ安く必要を満たせるように基金が作られた。いつも一番貧しい人々が一番に考えられねばならない」

とアルフレート・クルップは述べていたが[36]，消費組合は実際にはより広い労働者層を対象とした機関へとその機能を拡張していった。

1874年，消費組合が中央購買店 Central-Verkaufsstelle を建設したことにより，それは大規模店舗としての機能を持ち始めた。そこでは生活必需品のじゃがいも，石炭を扱う特別の窓口のほか，パン，ケーキ，ビール，魚を始めとして，タバコ，食器，筆記用具，学校教科費まで取り扱う食料雑貨部門，洋服・布地の販売から，従業員家族によるそれらの注文服への仕上げ・軍手製造も含む衣料部門，靴・鞄部門，洗濯機，ベッド，料理用レンジから子供の玩具まで，工場と連結して製造・販売する鉄製品・家庭用品部門などを持っていた。組合には更に1875年には肉屋，その後ブラシ工場や製氷所等が次々と加わり，年間

千トンを越す売上をあげるようになる（表６）[37]。

それは当時，「とてつもなく大きな市場」と呼ばれていた[38]。こうしてクルップ労働者は，生活資料のほとんどすべてをクルップの消費組合で市価より約二割安く購入するという特権を得ることができた[39]。この結果，労働者の家計では労働者の収入の平均半分以上，更にはほとんどすべてを消費組合に対して支払うことになったのである[40]。

未だ大きな百貨店が存在していないこの当時の状況の中で[41]，中央購買店の大規模さと安さは，多くの労働者にとって失いたくない工場勤務のメリットと感じられた可能性は大きいと言える。また多くのクルップ労働者の婦人が，店舗を利用すると同時に，少なからぬ数がその中で従業員として働いていたこともあり，この消費組合の存在を通じて，家族全体がクルップに結びつけられる傾向が助長されたことは疑いないと言っていいだろう[42]。

(2) 教育・医療

それと同時にクルップ労働者の子弟を対象とする教育への援助も行われ始めた[43]。

シェーダーホーフ，クローネンベルク団地ができてから，アルテンドルフ地

表６　消費組合施設・医療・衛生施設一覧（1912）

92購買部（肉，パン，ワイン，日常品，靴，鉄製品と家具）
43特別窓口（じゃがいも，石炭，麦，氷等）
11ビアホール，16軽食堂，３喫茶店，２肉屋，１蒸気力を使ったパン屋，１パン屋，１製粉所，１製氷所，１ブラシ製造所，１袋製造所，１コーヒー培煎所，２はさみ工場，１靴工場，１皿工場，ワイン貯蔵所，ホテル「エッセナーホーフ」，職員用カジノ，マイスター用カジノ
１病院，１簡易病院，１歯医者，４休養所，１医療用浴場，２浴場，９救護所，１病気中の婦人への援助基金，１産院，他の多くのシャワー，風呂施設

区にあった町立学校 Gemeindeschule が過密となり，工場は従業員用の私立国民学校 Privat-Volksschule を建設する。ここには二つの団地とヴェストエントの一部の子供たちも通うこととなった。半分プロテスタント，半分カトリックを対象としたこの学校については，工場が全面的に建築，設備，教員給料，図書館などの金銭面を負担した。ここには1877年には361人，1902年には1050人が在学している。

工場は国民学校の上の学校である補習学校 Fortbildungsschule をも援助していた。1874年以来，アルテンドルフの補習学校とエッセンのクルップ工場は緊密に連携しており，約1200人の学生が，昼間はクルップで働きながら，夜はクルップの補習学校でドイツ語，計算，製図，簿記，機械，物理などを各専門に分かれて学ぶという制度ができている。クルップ労働者の子弟にとって，工場内で徒弟として働きながら，クルップの補習学校で優秀な成績を修めるということが，工場内で最も早く出世する道となった。クルップの社宅団地に住む労働者の男子の子供は，多かれ少なかれこの国民学校―補習学校の制度のもとで成長することになっていたのである。

男子に限ることなく，クルップ労働者家族の女子に対しても別個の教育的施策がなされた。1875年，14歳以上の娘・婦人に対して「家事と収入能力」の獲得を目的として産業学校 Industrieschule が作られている。

そこでは，成人女性用に裁縫，ミシン縫い，刺繍などが教えられると同時に，就学中の女子に対しても水曜・土曜の午後に刺繍，編み物などが教えられた。その後1889年には更にクローネンベルク，シェーダーホーフ近くに，家政学校 Haushaltungsschule ができ，料理，生活資料の購入，野菜栽培，洗濯などあらゆる家事についての実践教育が行われた。クルップのこうした教育制度の下で，たとえるなら，じゃがいもを買うならクルップの中央購買店で，料理用レンジを買うなら簡単に修理もしてくれるクルップの工場でというような志向が強化されたことは十分想像できよう。こうした教育を通じた家族ぐるみの包摂は，

特に子供を持つ既婚労働者のクルップへの帰属性をいやがおうにも高める機能を持ったと言えるだろう。

更に医療に関しても，1866年コレラの伝染による死亡者が多く出たことをきっかけに1871年伝染病病院が作られた[44]。それまで労働者は，慈悲の友の会や修道院の病院など，一般の慈善団体の病院を利用していた。それに対し，1870—71年の普仏戦争に際して建設された野戦病院が，1872年に疾病金庫の工場病院とされている。

既に以前から設置されていた工場嘱託医は，1871年には12人に増えており，労働者は好きな医者をその中から選ぶことができるようになった[45]。病院は1880・90年代にも改築，新築を繰り返し，1872年から30年間にのべ四万人が利用している。1874年には，その付属として温泉施設も作られており，それは炭酸，硫黄，薬草風呂を持つ大施設へと発展させられている（表6参照）。

このように，生活資料の購入，子供の教育，医療設備の充実という，大きな投資に基づく企業内福利政策の展開は，労働者の生活に関わるもののすべてをさしあたり満たすものであったと言っていいだろう。労働者はクルップで働く限り，これらの特権を享受できたのであり，家族全体を通じたクルップとの関わりの深まりが，彼らを工場から出ていくことを少なからず阻止し，企業へと統合する働きをしたと推測することは充分可能であると言えよう。それは労働者の生活圏たる地域的検討によってより明確になる。

4．企業＝地域共同体の形成

(1) エッセンの「クルップ町」化

クルップの労働者住宅や消費組合などの福利施設の建設は，二つの意味で，クルップの労働者を包摂する地域の共同体を築いていた。

その一つは，クルップの存在するエッセン市における工場と社宅団地の占める位置の大きさを考えてみればわかる。すなわち，市全体の「クルップ町 Kruppstadt」化である[46]。エッセンの市の中心街からやや西に大きく敷地を広げた大工場と，工場から歩いて15—30分で通える距離にある社宅団地は(図1)，エッセン市の人口の半分近くをクルップ労働者及びその家族で占めさせた(表7)[47]。まさにエッセンは，クルップの代名詞となっていたのである。市内を走る道路にもクルップ通り，アルフレート通りが現れ，エッセン市の作る市の毎年の「カード」にもクルップの工場やその大砲が現れない時はないほどだった[48]。

特にエッセン市の場合，他の新興の鉱山都市と異なり，中世よりの帝国自由都市の伝統が多様な市民的雰囲気を形成していたことがクルップ労働者の意識にとっても影響していたと見られる。ゲルゼンキルヒェンやボーフムなどの鉱山都市においては，地元の土地を持つ層の住宅街と全く異なった場所に，他の地方から流れてきた土地を持たぬ労働者の鉱山労働者住宅が建設され，そのバ

表7　エッセン市の人口とクルップ労働者数

年代	エッセン市の人口	クルップの労働者数	クルップ関係者対人口割合	
1852	10475人	345人	(1850)	5%
1861	20766	2106	(1860)	18
1864	31306	6752	(1865)	45
1871	51513	8915	(1870)	28
1875	54790	9997		33
1880	56944	9092		30
1890	78706	15936		38
1895	96128	17673		35
1900	118862	24355		42
1905	231360	31880		51
1910	294653	37002		42

出典．寺尾誠「都市空間と都市形成—ルール工業地帯の場合」『社会経済史学』第39巻第6号11頁。

図１　クルップ鋳鋼所と社宅団地（1912年）

ラック的住宅街「コロニー」は差別の対象となった。それは定住者と浮浪人，より象徴的には庭と酒屋の違いと言われており，労働者たちは労働移動しても住む所があるという意味でバラック住宅を利用してはいても，決してそれに対して誇りや帰属感を持つことはなかった。

その点エッセンは市内の手工業や商業の発達とクルップの工場発達が相互に混じりあってなされ，もともと労働者に市内・周辺出身者が多かったこともあって，市民的な雰囲気を維持することが可能だったと言われている[49]。特にバラック建てと異なるシェーダーホーフ，クローネンベルクなどの優美さは，

「社宅団地に行くと子供達がよくしつけられ，いい服を着ているのを見かける。窓には清潔なカーテンと花が飾られ，きちんとした印象を与える」

と叙述されるような雰囲気を醸成していた[50]。それはアルフレート・クルップがエッセンにも生まれつつあった労働者街について，

「古い労働者街 Arbeiterviertel の中でのプロレタリアート化 Verproletarisierung から労働者を市民的に守る bürgerlich bewahren」

ことが必要であり，そのために社宅建設が必要だと述べていることからもわかる[51]。このようにしてエッセンとクルップは労働者の市民的向上を支える一体的構造を築こうとしていたと言えよう。

(2)　故郷としての社宅団地

市自体のクルップ町化と同様に大きい意味を持つのは，各社宅団地内が一つの地域共同体として完結した社会を形成していたことである。既にふれたように，アルフレート・クルップは

「私の工場は大きい，とても大きい共同体になるべきである。そしてそういう共同体には教会も学校もあるべきだ」

と考えていた[52]。その中で彼は各社宅団地に独自の住宅・生活様式を与え，それらに郵便局，学校，市場，更に消費組合商店，病院などを配置することで，団

地を地域生活の中心としていくことをねらっていた。こうした結果を例えば図2を参照しながら，シェーダーホーフ団地を取って見てみよう[53]。

多くの家は2DKの家が二つ付いた三階建の六家族用が一棟として建てられており，クルップの配水所からの水道と，クルップのガス工場からのガスが送られていた。家具は備え付けのもので，工場とデュッセルドルフの住宅協会が公募・入札したものである。家の近くには鉄道が通っており，社宅を囲んで大きな公園・泉・森，そしてアルフレート・クルップが「土に親しみ，労働者の酒場通いを防ぐ」ために設置した家庭菜園がある。

団地の中心には市場があり，それと同時にクルップの消費組合があって，生活資料の購入はたいていそこでできる[54]。子供達は近くのクルップ・カトリック国民学校やプロテスタント国民学校に通い，家事学校に娘達が通っている。社宅敷地内にクルップのビアホールがあり，「ビールやシュナップス（火酒）を飲みに」労働者が工場帰りに利用している[55]。独身の専門労働者用の寮もあって，そこでは付属のボーリング Kegel 場も利用できる。公園にはのちには音楽ホールもつくられ，五月から九月は毎週市立オーケストラによってコンサートが開かれるようにもなる。

住民にとって必要なすべてのものは，このシェーダーホーフ団地の中に贅沢なほど完備していると言っていい。クルップ労働者は家族を含めてこの一つの企業＝地域共同体の中で生きることになる。一つのまとまった小社会を形成しているこの社宅団地＝コロニーに対し，多くの人々は自分の「故郷」としての誇りと愛着を感じている[56]。

「父も祖父も曾祖父もクルップの社宅団地を故郷とし，いい時も悪い時も工場と結びついていた」

「私はクローネンベルクに帰らなければいけない。なぜなら私はそこに属しているから！」

そして常に労働者を監視するクルップの警察的・軍隊的象徴とも後に評され

A－D．団地
E．　消費組合店舗
F．　独身専門労働者住宅
G．　ボーリング場
H．　家政学校
J．　プロテスタント国民学校
K．　カトリック国民学校
L．　ビアホール
M．　市場広場
N．　じゃがいも・石炭購買部
O．　公園
P．　音楽室
Q．　公衆便所
R．　警備所
S．　家庭菜園
T．　野菜栽培所
U．　パン屋

図2　シェーダーホーフ社宅団地

た住宅管理人についても，ケルンの大司教カーディナル・シュルテは，

「私は真の慈善というものをクルップを通して親の家で学んだ。私の父はクルップの住宅管理職員だったのだ」

と述べているのである。

労働者がクルップに就職してから，遅くても10年以内には割り振りが回って来ると言われるこの社宅団地への入居は，労働者を企業＝地域共同体へ組み込み，企業内にしっかり統合するものであったと言っていいだろう。エッセン市が「クルップ町」となり，社宅団地が労働者の「故郷」となっていき，クルップが「国家の中の国家」と呼ばれるようになったことは[57]，福利を通じて共同体としての企業のもとで労働者の生活を向上させ，同時に労働者の基幹層をその生活や家族と共にクルップに確固と統合することで，生産体制を安定化させ，企業そのものの発展を保障していくという二重の意味で安定化した労資関係を築いたのである。

注

1）Historisches Archiv der Fried. Krupp（以下 HA. Krupp と略），Werksarchiv（以下 WA. と略）IX$_{\varepsilon}$124, Jahresbericht der Handelskammer für Essen, Werden und Kettwig pro 1870, S. 3, 43 ; pro 1871, S. 3, 4.

2）HA. Krupp, WA. I 1420, Bl. 31.

3）Richard Ehrenberg, 'Schwäche und Stärkung neuzeitlicher Arbeitsgemeinschaften', in : *Archiv für exakte Wirtschafts-forschung* (*Thünen-Archiv*), Band 3, Jena, 1911, S. 447.

4）Alfred Krupp, *Briefe und Niederschriften 1826-1887* (unveröffentlichte Maschinen-schriften, in HA. Krupp, 以下 *Briefe und Niederschriften* と略), Bd. 8, S. 196-197.

5）*Briefe und Niederschriften*, Bd. 9, S. 1-2.

6）Ludwig Puppke, *Sozialpolitik und soziale Anschauungen frühindustrieller Unternehmen in Rheinland und Westfalen*, Köln, 1966, S. 200, 267.

7）Richard Klapheck, *Siedlungswerk Krupp*, Berlin, 1930, S. 17.

8）Wilhelm Berdrow (hrsg.), *Alfred Krupps Briefe 1826-1887*. Im Auftrage der

Familie und der Firma Krupp, Berlin, 1928（以下 *Briefe* と略）, S. 285. ; *Quellensammlung zur Geschichte der sozialen Betriebsverfassung. Ruhrindustrie unter besonderer Berücksichtigung des Betriebsverfassung einzelner Unternehmen der Ruhrindustrie,* Bonn, 1965, S. 276

9) *Briefe und Niederschriften,* Bd. 11, S. 262.

10) Vgl. Gustav Schmoller, *Zur Geschichte der deutschen Kleingewerbe im 19. Jahrhundert.* Halle, 1870, S. 683, 704

11) 大河内一男『独逸社会政策思想史』1936年，第二編参照

12) *Quellensammlung,* S. 128.

13) *Briefe,* S. 261. ; *Quellensammlung*, S. 284

14) *Die Einrichtungen für die Wohlfahrt der Arbeiter der größeren gewerblichen Anlagen*, Berlin, 1876, S. 82f.

15) *Briefe,* S. 254

16) Daniel Stemmrich, *Die Siedlung als Programm. Untersuchungen zum Arbeiterwohnungsbau anhand Kruppscher Siedlungen zwischen 1861 und 1907*, Hildesheim, 1981, S. 175, 205.

17) *Briefe und Niederschriften,* Bd. 9, S. 284.

18) *Briefe und Niederschriften,* Bd. 11, S. 123.

19) *Briefe und Niederschriften,* Bd. 9, S. 287.

20) *Briefe und Niederschriften,* Bd. 11, S. 274.

21) 'Alte Kruppianer erzählen. Hammerschmied vor 50 Jahren', von Fritz Niegemann, in : *Krupp. Zeitschrift der Kruppschen Betriebsgemeinschaft,* Jg. 28, Nr. 17, 1937, S. 364-365.

22) *Weckruf*, 21, 25, Jan. 1902; *Allgemeiner Beobachter,* 8, 29, März. 1902.

23) *Briefe und Niederschriften,* Bd. 13, S. 13.

24) Johannes Fritzen, 'Abschied vom Cronenberg', in : *Krupp. Zeitschrift der Kruppschen Betriebsgemeinschaft,* 30. Jg. Nr. 9, 1939, S. 152.

25) *Wohlfahrtseinrichtungen der Gußstahlfabrik von Fried. Krupp zu Essen a. d. Ruhr*, Essen, 1902（以下 *Wohlfahrtseinrichtungen* と略）, Band 1, S. 20 ; Johann Paul, *Krupp und die Arbeiterbewegung,* Düsseldorf, 1987, S. 103-105

26) Miethbestimmungen und Hausordnung für die Wohnungen der Firma Fried. Krupp, 1895, in : *Wohlfahrtseinrichtungen,* Band 3, S. 1-8 によると「第一条・各居住者は職員の指示に無条件で従わなければならない．賃借人は一日のいつでも住居管理職員に部屋の

立ち入りを許可する義務がある」「第四条・各人は規律，秩序，平和を守り，近隣者共々，家族共々そのために励むこと」をはじめとして「第十一条・一階に住む者は日曜を除いて毎日家の前と横の道を掃く義務がある．日祭日の前は午後3－4時に，他の日は午前9時までにやること．晴れた日にはごみを飛ばさぬよう水をまくこと．排水溝を流す時は，つまるのを避けるため，汚水だめの格子の上にやらないこと．賃借者は道の掃除につき警察規定の支配下にあり，その罪には警察の罰が課せられる」に見られるような非常に細かい注意が規定されていた．

27) Adolf Günther, *Die Wohlfahrtseinrichtungen der Arbeitgeber in Deutschland,* in : Schriften des Vereins für Socialpolitik, Bd. 114, Leipzig, 1905, S. 131. また本山貞一「『ヘル・イム・ハウゼ』体制と企業福利制度」筑波大学『経済学論集』第二号（1978年）を参照．

28) *Neue Zeit,* Heft, 11, 1889, S. 505

29) 田中洋子「ドイツ大企業における企業内福利政策の生成」を参照．

30) *Wohlfahrtseinrichtungen,* Band 1, S. 48

31) Gerhard Huck, 'Arbeiterkonsumverein und Verbraucherorganisation. Die Entwicklung der Konsumgenossenschaften im Ruhrgebiet 1860-1914', in : Jürgen Reulecke und Wolfhard Weber (Hrsg.), *Fabrik - Familie - Feierabend. Beiträge zur Sozialgeschichte des Alltags im Industriezeitalter,* Wuppertal, 1978, S. 220-225. しかし一般の10-400人規模の地域の消費組合運動は1862-65年に急速に盛り上がった後は停滞を続け，1868年にはシュルツェ-デリッチュの一般組合 Allgemeine Verband のライン・ヴェストファーレン支部となる．より大規模に展開しはじめるのは1901年以降であった．その間，企業の消費組合はそれらの動きと全く無縁に大きな発展を続けていたのであり，鉄鋼，鉱山の消費組合は，ルールの混合企業の特徴となっていた．第一次大戦前に最大のクルップ，二番目のヘルデ連合をはじめとして100を越える数の消費組合が存在していた．

32) HA. Krupp, WA. VIII 175. ; Paul, *Arbeiterbewegung,* S. 106-109

33) *Briefe und Niederschriften,* Band 9, S. 173

34) *Wohlfahrtseinrichtungen,* Band 1, S. 40

35) HA. Krupp, VIII 127, S. 10.

36) Richard Ehrenberg, 'Krupp-Studien III. Die Frühzeit der Krupp' schen Arbeiterschaft', in : *Archiv fiir exakte Wirtschaftsforschung* (*Thünen-Archiv*), Dritter Band, Jena, 1911, S. 129 ; *Quellensammlung, S. 285*

37) *Wohlfahrtseinrichtungen,* Band 1, S. 43-54. ; Statistische Angaben, S. 105

38) Jul. Post und H. Albrecht, *Patriarchalische Beziehungen* in der *Großindustrie*, 1893, S.

124.

39) Hermann Schröter, 'Die Firma Friedrich Krupp und die Stadt Essen', in : *Tradition. Zeitschrift für Firmengeschichte und Unternehmerbiographie*, Nr. 6, 1961, S. 262.

40) Post und Albrecht, *Patriarchalische Beziehungen*, S. 124. ; Richard Ehrenberg, 'Krupp-Studien II. Verdienst-Möglichkeit von Arbeiter-Haushalten', in : *Thünen-Archiv*, Band 2, Jena, 1909, S. 223f.

41) 注31で述べたように，大きな消費組合が現れるのは1901年以降であり，またライン地方でフランス，アメリカにならった百貨店ができるのは1880年以降のことで，クルップの中央購買部はその意味でドイツの大規模消費施設の先駆けとも位置づけうる．*Rheinisch-westfälische Wirtschaftsbiographie*, Münster, 1932, Band 7, S. 48-49.

42) 消費組合の販売員はクルップ労働者の未亡人と子女によって構成されており，クルップ共同体を強化する方向で利用されたと言える．1901年には538人，1912年には1387人が働き，クルップ労働者と同じ疾病金庫に組み込まれていた．また客は買物するごとに割引スタンプを貰い，それを集めてまた買物をすることができた．*Wohlfahrtseinrichtungen*, Band 1, S. 44, 47, 54, *Statistische Angaben*, S. 105.

43) *Wohlfahrtseinrichtungen*, Band 1, S. 97-105. ; *Quellensammlung*, S. 438-439

44) *Wohlfahrtseinrichtungen*, Band 1, S. 55-74. ; *Quellensammlung*, S. 433-435

45) Wilhelm Vossiek, *Hundert Jahre Kruppsche Betriebskrankenkasse 1836-1936*, Berlin, 1937, S. 37.

46) 「エッセンは過去も今もクルップ町として一般に知られている．クルップの名前はエッセンに最大の競争力を与えており，外国でもエッセンはいつもクルップ市と見なされている」'Essen, die Kruppstadt', in : *Krupp. Zeitschrift der Kruppschen Werksgemeinschaft*, Jg. 26, Nr. 12, 1935. ; Hermann Schröter, 'Die Firma Krupp und die Stadt Essen', S. 260.

47) 寺尾誠「都市空間と都市形成――ルール工業地帯の場合」『社会経済史学』第39巻第6号，11頁．

48) Vgl. *Krupp und Essen*, Essen, 1985.

49) Wilhelm Brepohl, *Industrievolk im Wandel von der agraren zur industriellen Daseinsform dargestellt am Ruhrgebiet*, Tübingen, 1957, S. 11-15, 17-20. 寺田，前掲論文参照．

50) *Der Nationale Arbeiter=Verein Werk Krupp Essen*, Essen, 1911, S. 33.

51) Richard Klapheck, *Siedlungswerk Krupp*, Berlin, 1930, S. 8.

52) Puppke, *Sozialpolitik*, S. 267.

53) *Das Arbeiter=Wohnhaus auf der Kruppschen Gußstahlfabrik in seiner baulichen*

Entwicklung, Essen, 1907, S. 22-24.

54) 郵便局が1874年にでき，週市もクローネンベルクでは1874年に，シェーダーホーフでは1881年から行われている．'Abschied vom Cronenberg', S. 152.

55) 「クローネンベルクの者 Cronenberger がビール一杯やシュナップス（火酒）を飲もうと思ったら，まずクルップのビアホール，グアースバッハに行った」'Abschied vom Cronenberg', S. 152.

56) *Quellensammlung*, S. 408-409.

57) Wilhelm Berdrow, *Alfred Krupp*, Bde. 2, Berlin, 1927, Band 2. S. 258.

おわりに

こうしてクルップでは，企業を一種の長期的な生活共同体としてとらえようとする考え方のもとで，労働者を，彼らの日常生活を含めて企業＝地域共同体の中に包摂していくことに成功したと言うことができる。

一般的に言って，資本主義での労資関係は，市場での取引関係を中心として考えられることが多く，そうした見方に立てば，共同体というような考え方はいわば非資本主義的・経済外的なものとして，思考の外側に押しやられてしまう場合が多い。しかし，一見すると資本主義の論理と合わないように見える，こうした共同体重視型の政策が打ちだされることによって，かえって逆に，資本主義企業として安定的に発展していく基盤がつくられていく場合があるということを，このクルップの事例は物語っているのである。

こうした関係は，はじめにも述べたように，資本主義の歴史がイギリスで開始されて以来，はじめてつくり出されたものであったと考えられる。ドイツの大企業は，世界に先駆けて，市場でのその場その場の売買関係だけにとどまらない，企業内の人間の長期的な生活状況を重視した労資関係のあり方を，独自に形成したと言うことができよう。

日本はこの時期，まだ明治維新直後であったが，その後19世紀末から20世紀初頭にかけて，クルップをはじめドイツ大企業でのこうした福利政策が精力的に紹介され，日本の労務管理政策にも大きな影響力を与えていくことになる[1]。

一方，その前後のイギリスやアメリカでも，クルップと似たような政策を行っていく企業も存在している。パターナリズムや，福利企業の例として紹介される事例の中には，クルップと同じような方法を使って，激化する労資紛争を回避しようという同様の試みを見出すことができる。しかし，「ファクトリー・コロニー Factory colony」や，「ファクトリー・タウン Factory town」をつくる事例には，比較的辺鄙な場所に新しく工場を作り，一度に多くの人を集める必要性があるような，労働市場条件からの要請が強い地方工場であるという場合や，市場での売買関係を基本としながらも，個人的に労働者への慈善 Charity の必要性に目覚めて福利政策を行う場合などが多く含まれている。こうしたケースでは，人が集まった後や，都市化の進展に伴って福利政策の必要性がなくなったり，経営者の交代によって政策が次々と変更されていくことになる。また，景気の後退に伴って簡単に大量の解雇を行い，労働者から強い反発を受ける事例も見られる[2]。

つまり，イギリスやアメリカの企業では，市場を第一の要因として考えた上で，それを支えたり，それに付加する形での福利政策は一部企業で展開されたものの，クルップのようなドイツ大企業が行ったように，共同体的な考え方の基礎の上に企業の経済活動を結びつけていくような方法は，ほとんど採用されなかったと言ってもいいだろう。

ドイツの大企業は，資本主義化と平行して，ドイツ社会が法的・行政的に企業に求めてきた，企業をその中で働く者の生活単位として認めさせる方向に制約されながらも，またそれを自らの積極的な論理として，きめこまやかな福利政策として展開してきた。ドイツの資本主義は，英米の市場中心主義とは異なった，独自の共同体的な労資関係のあり方を新たにつくり出してきたのである。

ここには，資本主義社会のあり方そのものの，もう一つ別の形が提起されていたと言うことができよう。

注

1）例えば鐘紡の武藤山治がクルップの福利政策をモデルとして企業内の労務管理政策を行ったことはよく知られている．『武藤山治全集』（新樹社，1963年）第一巻151～158，510頁，協調会『本邦産業福利施設概要』大正13年，『獨逸に於ける福利施設』大正14年，間宏『日本労務管理史研究』（御茶の水書房，1978年），47～48，307～321頁などを参照．

2）さしあたりイギリスについては，Patrick Joyce, *Work, Society, and Politics. The Culture of the Factory in later Victorian England,* Worcester, 1980 ; Robert Fitzgerald, *British Labour Management and Industrial Welfare 1846-1939,* London/New York/Sydney, 1988, アメリカについては，Morrell Heald, *The Social Responsibilities of Business. Company and Community 1900-1960,* Cleveland, 1970 ; Stuart D. Brandes, *American Welfare Capitalism 1880-1940,* Chicago, 1976 ; Gerald Zahavi, *Workers, Managers, and Welfare Capitalism,* Chicago, 1988 などを参照．